

浜田義文『カント倫理学の成立——イギリス道徳哲学

及びルソー思想との関係——』

(本文 二八一頁)

まえがき、凡例、目次 計一八頁。索引 四頁。勁草書房、昭和五十六年刊)

小 熊 勢 記

法政大学教授、浜田義文氏のこの新著は、題名の示すように、一七六〇年代におけるカント倫理学の成立を、イギリス道徳哲学及びルソー思想との密接な連関のもとに考察したものである。周知のように、浜田教授はさきに同じ出版社から、『若きカントの思想形成』を公けにして好評を博された。こんどの著書は、研究の対象において部分的に前著と重なるところもあるが、今述べたような独自の研究意図をもっている。

カント倫理学の成立に関する、従来の代表的な研究には、メソツァー、メッサー及びシルブ等のものがある。しかしそれらの研究には、共通して資料上の重大な制約があった。整備された資料に基づいて、一九五〇年代にこの問題に関する新しい研究を起こしたのは、ヘンリッヒであり、シュムツカーである。特に緻密な実証的研究を基礎とするシュムツカーの研究は、画期的なものである。シュムツカー以後も、諸外国では新しい立

場からの研究が相ついでいる。残念ながらわが国においては、これまでカント倫理学の成立が、主題として立ち入って考察されることは、あまりなかった。浜田教授の研究は、ヘンリッヒ、シュムツカー及びそれ以後の新しい研究の成果を充分にとり入れながら、上に述べた独自の研究意図に基づいてこの問題を考察しており、わが国のカント研究における多年の空白をいっきよに埋めるものである。学界に大きな寄与をなす重要な著作だと思われるので、以下、紹介と批評を試みる。

一 カントとイギリス道徳哲学

この書物は大きく主論文と補論の二つに分れる。主論文は、一貫した共通のテーマをもちながら、それぞれ独立の論文とみなすこともできるような、十一の章から構成されている。

第一章 問題状況

哲学研究 第五百四十四号

- 第二章 ホップズ・マンデヴィル説
 第三章 シャフツベリ・ハチソン説
 第四章 道徳原理の根本原理の探究
 第五章 道徳感情
 第六章 ルソーとの思想的邂逅
 第七章 ルソー思想の根本概念
 第八章 『覚書』の思想とルソーの影響
 第九章 新道徳原理の獲得 『共通意志』
 第十章 靈界と知恵の立場
 第十一章 一七七〇年「就任論文」

補論はつぎの二つの論文から成る。

- 一、イマヌエル・カントとアダム・スミス
 二、ハチソン・スミス・カント——道徳感情の問題をめぐって——

まず、主論文を中心にして、著者の論旨をたどりながら、内容の紹介を行なおう。

著者は、序論ともいふべき第一章において、この書物のとりあげる問題と研究意図について詳しく述べた後に、本論の考察をイギリス道徳哲学からはじめる。著者がそうするのは、カントとイギリス道徳哲学の思想的交渉の考察に先だつて、後者をそれ自身としても詳しく考察することが必要と考えるからである。ところでイギリス道徳哲学には、ホップズからマンデヴィルへ進む、いわゆる利己説の流れと、シャフツベリからハチソンへ至る利他説あるいはモラル・センス説の流れとの、二つの主要な潮流がある。著者はそれぞれの根本思想、すなわち「自

一二四

愛心」、「仁愛」及び「モラル・センス」等の諸概念を、相互に比較しながら立ち入った考察を行ない、両潮流の思想の根本特徴を明らかにしている。そして著者は、自愛心を規制する道徳原理を各人の外部に求めたホップズ・マンデヴィル説に比して、シャフツベリ・ハチソン説は、仁愛の働きとモラル・センスを各人の内部に見出した点において、道徳の自律性獲得に向つての一步前進がみられると論じている。他方、著者はモラル・センス説の困難性についても述べている（第二章、第三章）。

カントが一七六二年に書いた懸賞論文『自然神学及び道徳学の諸原則の判明性に関する研究』（以下『懸賞論文』と略す）は、一七六〇年代におけるカントの倫理学探究の出発点を示すものとして、注目に値する。著者はこの論文におけるカントの道徳論について、詳細な考察を行なっている。そして前半の、責務の概念や責務の形式的原則を論じる部分については、特にクルージュスとヴォルフの影響を考察している。また、道徳感情や責務の実質的原則を論じる後半部分については、メンツァー、ヘンリッヒ及びシルプ等の相反する意見をとりあげて論じながら、先に第三章で行なつたモラル・センス説の考察に基づいて、そこにおけるハチソンの強い影響を確認している。そして『懸賞論文』の道徳論が、全体として、ハチソンとクルージュスのどちらの影響をより多く受けているかという、近年の研究者たちの論争に関して、カントの思想的位置の考察を行ない、独自のすぐれた見解を示している。著者によれば、カントはク

ルージュウスの「神律的當為倫理学」から、當為倫理学の面を學んでそれをいつそう徹底したが、他方、神律的な面は拒否し、その点ではかえってハチソンの「道德感情」を、自律的な道德原理として受け入れ、しかもそれを純化された當為倫理学に結びつけたのである。著者は、また、カントがここで両者の影響の微妙な接点に立ったところに、この時期のカントの倫理学の特別の困難さもあると指摘している（第四章）。

つぎに重要なのは、一七六四年に執筆された『美と崇高との感情に関する觀察』（以下『美と崇高』と略す）である。この書物は、カントに対するイギリス道德哲学の大きな影響を示している。著者はシュムツカーの意見に反対して、この書物の道德論的意義を重視する。そして著者は、この書物の中の倫理学的でないし人間学的思想について、それを重要と思われる三点（(1)「觀察者の眼」、(2)「人間本性の美と尊嚴の感情」、(3)感情の調和的秩序）にしぼって、その特徴と問題点を考察している（第五章）。

以上の第二章から第五章——及び後に述べる補論——において、著者が、これまでわが国において考察されることの少なかつた、カントとイギリス道德哲学との思想的交渉を立ち入って論じたことは、この書物の大きな功績の一つと認められる。カントはイギリス道德哲学に関して、必ずしも多くを語っていないが、著者は後者をそれ自身としても詳しく考察することによって、その影響を受けたカントの内面的な思索のあとを浮び上らせている。

二 カントとルソー

イギリス道德哲学の影響のもとに、道德の新しい根本原理を探究するカントにとつて、ルソーとの思想的出会いが、重大な転機になる。それについては、「ルソーが私の誤りを正してくれた。……私は人間を尊敬することを學ぶ。」という、カント自身の有名な告白がある。そこで著者は、つぎに、ルソーに対するカントの思想的とりくみについて考察する。著者は、まず、両者の出会いの時期や意義について考察する（第六章）。

つぎに、先のイギリス道德哲学の場合と同様に、両者の思想的交渉の考察に先だつて、ルソーの根本思想について考察している。著者は、ルソーの根本思想を、「自己愛」、「良心」及び「一般意志」の三つに分けて論じている。著者は、なかでも、自然人の原本的感情である「自己愛」が、ルソーの中心思想であり、「良心」も「一般意志」も、結局は、「自己愛」の延長線上に展開されると、とらえている。その「自己愛」に関して、著者は特に、それが内容的にも、また、思想史的系譜の上からも、ホップズ・マンデヴィルの「利己心」、及び緩和された「利己心」にはかなならぬハチソンの「自愛心」の、いづれとも異なることを明らかにしている（第七章）。第七章は、ルソーの根本思想を考察しながら、それをイギリス道德哲学との密接な連関においてとらえているのが、大きな特色である。

著者は、つぎに、いよいよルソーに対するカントの思想的とりくみについて考察する。著者はまず『美と崇高』との感情に関

する観察に対する『覚書』（以下『覚書』と略す）をとりあげる。不完全な、断片的な文章から、カントの根本思想を系統的に構成した上で、著者は、つぎのような考察を行なっている。

カントは『覚書』において、「自然人」、「自然状態」の概念を、「文明人」、「文明状態」の概念と鋭く対立させているが、そこには基本的観点におけるルソーとの一致がみられる。また、カントは、行為の動機としての普遍的人間愛を、「幻想」としてしりぞけているが、それは、自然人の力強い「自己愛」に基づく他人への愛を否定しているのではなくて、文明状態における同情や親切等の仁愛のあり方を批判しているのであり、ここにもルソーの強い影響がみられる。

『覚書』においてカントに対するルソーの最大の影響を示しているのは、人間の尊厳の思想である。先に述べたカントの告白も、それを示している。しかし『美と崇高』のうちにも、すでに「人間本性の美と尊厳の感情」の思想がある。著者は二つの思想を比較して、『覚書』における人間の尊厳の思想の特徴は、それが「被造物の秩序の中における人類の位置」の自覚としてなされ、その尊厳の根拠が、創造による人間の本質規定としての自由のうちに求められるところにある、と述べている。

著者はまたカントとルソーの間には、自己愛と自由のとらえ方に関して、微妙な相違のあることをも論じている。

『覚書』において注目すべきことの一つは、これまでカントの倫理学探究において中心原理とされてきた、「道徳感情」の再検討が行なわれていることである。カントは、一方では、

「道徳感情」に依然として強い信頼をおきながら、他方では、その非力、多様性、相対性を指摘している。代わって「意志」が、より根本的な道徳原理として登場する。意志が自由の法則に従って善の最大根拠をなす時、意志は完全である、とされる。そして「道徳感情」はいまや意志の完全性についての感情であるとして、副次的な原理の位置におかれている（第八章）。

三 新しい道徳原理の獲得

以上のように、『覚書』のうちには、明らかに決定的ともいふべきルソーの大きな影響が現われている。ところで『覚書』のなかには、かなりな量（約百行）のラテン語の省察が含まれており、それらは断片的ながらも、一つのまとまりのある内容を示している。そしてこのラテン文省察には、『覚書』と異なるカントの思想の、別の面が述べられている。カントはその省察の中で、『感賞論文』ではじめて道徳原理の探究をつづけており、めざす道徳原理を一応獲得している。『覚書』のラテン文省察のもつ重要な意味を強調したのは、ヘンリッヒやシュムツカーの功績であるが、著者もその意義を重視して、独自の立場から考察を行なっている。

『覚書』のラテン文省察は、内容の上から前半と後半に大別できる。著者は、その前半については、そこにすでに批判期倫理学における命法の三分（「熟練の命法」、「慎慮の命法」及び「道徳の命法」）と同じ考えがみられることに、注意を促し

ている。後半においてカントは、「共通意志」、「意志の普遍性の原則」、「責務の根拠としての共通意志に対する道徳感覚の随伴」等の思想を述べているが、著者はそこに道徳学の新しい根本原理の獲得を見出し、それらについて詳しく考察している。

著者がつぎに、特に重要とみなすのは、一七六六年に書かれた、『形而上学の夢によって解明された視靈者の夢』（以下『視靈者の夢』と略す）である。この書物は、認識不可能な靈界の問題に関しては、「無知」の態度をとるべきことを主張するのであるが、同時に、伝統的形而上学をも視靈者の夢になぞらえ、それに対する吟味と批判を行なっている。ところでカントはこの書物において靈界の叙述を試みているが、その中で靈界を道徳的世界としてとらえて、独特の道徳論を展開している。また最終章では、「本書全体の実践的結論」として、彼の基本的な立場を述べている。著者はこの二ヶ所について、立ち入った考察を行なっている。

第一の箇所におけるカントの道徳論に関しては、著者は特に、そこにおける「普遍意志の規則」の考えと、それに伴なう「道徳感情」の位置づけに注目している。著者はこの部分の考察の最後のところで、『覚書』と『視靈者の夢』の中で明らかにされた、カントの「普遍意志」とルソウの「一般意志」とを比較考察して、妥当な見解を示している。第二の箇所に関しては、著者は、カントのいう「知恵」の立場について考察している。著者はここで、「心胸」と「道徳感情」の関係、及び「心胸」と「普遍意志」との関係について、詳細に論じ、いくつつか

の注目すべき見解を述べている（第十章）。

著者は最後に一七七〇年の『感性界及び英知界の形式と原理』（以下『就任論文』と略す）をとりあげる。著者は、カントがこの論文において、(1)感性と悟性の原理的区別によって、英知界の存在を基礎づけたこと、(2)道徳学を英知界に関わる悟性認識の学としてとらえて、純粹道徳学を構想したこと、(3)純粹道徳学の中で、感性や感情に対しては、道徳原理として重要な位置と役割を与えていないこと、に注目している。そしてそれらの点から著者は、『就任論文』を一七六〇年代におけるカントの倫理学探究の最終の到達点とみなし、かかる純粹道徳学の構想によって、カントはいまやイギリス道徳哲学からも、また、ルソウからもはなれて、独自の倫理学的立場に立つたと主張している（第十一章）。

補論については、簡単に触れておく。補論一で、著者は、カントとスマスの思想的対比を試みている。同時代人であった、二人の偉大な思想家の親近性と相違性を示す、興味深い考察が行なわれている。補論二は、道徳感情の問題を中心として、ハチソン、スマス及びカントの三者の関係を論じている。カントとハチソンの関係については、主論文の場合とは異なり、批判期におけるカントがモラル・センス説を如何に批判したかが、考察されている。

四 批評

はじめに述べたように、一七六〇年代におけるカント倫理学

の成立過程を、イギリス道德哲学及びルソー思想との思想的連関のもとに明らかにするのが、著者の意図である。著者はそのために、一方では、一七六〇年代の諸著作と諸資料を詳細に分析して、できるだけカントに即しながら、実証的な考察を進めている。著者はそのさい、これまであまり顧みられなかった、『覚書』のラテン文省察をも詳細に考察している。著者はその考察において、特に、一七六〇年代のカント倫理学の発展を、後の批判的倫理学の立場から単にそれへの一段階としてのみみるのではなく、それ自身としての真の姿においてとらえることに留意しているようにみえる。また、著者は、他方では、イギリス道德哲学とルソーの根本思想を立ち入って検討し、それらとカントの思想的交渉を丹念にたどっている。カントとイギリス道德哲学の思想的交渉を正確にとらえるために、著者は、同時代に用いられたイギリス道德哲学の独訳書を参考にするという労をさえはらっている。しかもその考察を行なうさいに、単にカントの側から両思想を問題にするだけでなく、時としては、両思想の側からもカントをとらえている。それどころか著者はこの「相互照射」を、ルソーとイギリス道德哲学との間にも行なっている。このように著者は、カントの倫理思想の発展を、常にイギリス道德哲学及びルソー思想との錯綜した三つ巴の關係のなかでとらえて、考察している。以上の考察によって、一七六〇年代におけるカント倫理学の発展は、ありのままの、より生々とした姿において詳細に明らかになった。また、カントの生きた啓蒙主義の時代の共通の思想的課題と、その中にお

けるカントの位置についても、大いに光りが投げられた。著者は見事にその意図を達成した、と言わねばならない。

そのほか個々の問題の考察においても、この書物の特色と長所は、決して少くない。しかしそれらのいくつかにについては、内容の紹介のさいに触れたので、これ以上は述べない。

ところですぐれた、良心的な労作に対しても、なお問題を見出して批評を加えることは、書評子の免れ得ない義務の一つである。われわれはいまやその義務を果さねばならない。

著者とわれわれの間には、一七六〇年代におけるカント倫理学の発展をとらえる基本的な観点において、いくらか異なるところがあるように思う。著者は「カント倫理学の成立」の意味を、「カントにおける新しい道德原理の獲得」の意味に解しているが、われわれはより広く、カント倫理学の基本的立場の確立と考える。すなわち、新しい道德原理のほかに、それと密接に結びついている一連の基本的諸原理、及びそれらを支えている哲学的世界観の確立こそが、カント倫理学の成立であると解する。また、われわれは、カントの倫理思想の発展を考察するさいに、ハチソンやルソーとの思想的連関とともに、カント自身の哲学思想一般との連関をも大いに考慮する。特に形而上学に関するカントの思想との、密接な連関を重視する。カントの全哲学的営みは、ある意味では、形而上学の改革をめざしたとみることもできるのであり、倫理学の形成も、それとの連関をはなれて考察することはできない。そしてまたわれわれは、一七六〇年代におけるカントの倫理思想をできるだけそれ自身と

してとらえようとする著者の態度に共感をおぼえながらも、他方では、それをもっと全体としてのカント倫理学の発展のうち位置づけてみる。

以上の観点からみる時、われわれの見解は、いくつかの具体的な問題の考察においても、著者のそれと異なってくる。

著者は、『就任論文』を一七六〇年代におけるカント倫理想の発展の到達点とみなし、『視靈者の夢』と『就任論文』の間に連続的発展をみているように思われる。それに対して、われわれは、この二つの著作の間には発展と同時に立場の変更があり、『就任論文』は、全体としては、後退であると思ふ。

著者が『就任論文』を到達点として評価するのは、そこにおいてはじめて純粹道徳学が構想され、ハチソンやルソーの影響をはなれた、新しい道徳の根本原理が獲得されたと考えるからである。たしかにそこには、「道徳感情」から出発して「普遍意志」に至り、それが知性化されて「純粹悟性」に至るといふ、一つの発展をみることが出来る。しかし『就任論文』は、他面において、英知界の存在と、純粹悟性によるその認識とを認めることによって、一七五〇年代の合理的形而上学の立場に復帰し、また、完全な存在である神が認識の原理であるとともに倫理学の原理でもあると主張することによって、倫理学を形而上学によって基礎づける形而上学的倫理学の立場にもどっている。しかし、合理的形而上学と形而上学的倫理学に対する反省が強まり、倫理学の根本原理を形而上学から独立に発見せねばならないと考えたのが、一七六〇年代におけるカント

の倫理学探究の出発であった。カントはそのために、合理的形而上学に代わるものとして、一時、ハチソンやルソーに傾倒したのである。しかるに、探究の終りに、再びもとの合理的形而上学に復帰するというのでは、それを発展とのみ評価することはできない。また、後の批判的倫理学の立場から考えてもそうである。理論的形而上学の断念と、実践理性による道徳原理の独自の基礎づけとは、批判的倫理学の最も基本的な考えである。

著者は『視靈者の夢』と『就任論文』との間に、特に立場の変更を認めてはいないように思われる。著者も『視靈者の夢』における「知恵」の立場が、この書物全体の実践的結論を示すものとして重要であることは強調している。しかし知恵の立場とは、結局、英知界の認識に対しては「無知」の態度をとり、「心胸」の導きに従って道徳的実践を行ない、神や不死の問題に対しては道徳的信仰の立場をとる、ということである。この結論と、先に述べた『就任論文』の基本的立場との間には、明らかに立場の変更がある。とにかく『視靈者の夢』から『就任論文』に至る、カントの倫理想の発展については、もっと立ち入って考察すべき問題があるように思われる。著者はあまり用いていないが、この時期のものと推定される遺稿『道徳哲学への省察』は、もっと考察されてよいと思う。

『就任論文』の代わりに、われわれは、『視靈者の夢』を、一七六〇年代におけるカントの倫理想の最高の到達点を示すものとして評価する。この書物には、先にも述べたように、つ

ぎのことが示されている。(1)人間の認識能力の吟味によって、英知界の認識(理論的形而上学)は否定される。(2)しかし、他方、その吟味そのものが新しい形而上学として、いわば「経験的形而上学」として登場する。(3)道德の問題は、形而上学や理論的認識から独立に探究されねばならない。(4)伝統的形而上学における神や不死の問題は、理論的認識としては否定されても、道德的信仰としてとらえなおされねばならない。これらの考えは、批判哲学と批判的倫理学との、基本構造の枠組みを示している。それが『視靈者の夢』において、すでに一応成立している。もとよりこの書物で成立した基本構想は、まもなく『就任論文』によって否定され、その後批判哲学が形成されてゆくなかで、再び——そしてこんどは最終的に——とられることになる。しかしわれわれは、とにかく『視靈者の夢』において、この構想がひとたび成立したことを高く評価したいと思う。

先に述べたように、以上の批評は、この著書の成果に目をみはりながらも、異なる観点からあえて二、三の疑念を表明したものである。この書物の全体としてのすぐれた価値をそこなうものではないであろう。著者の創見と努力に重ねて敬意を表しつつ筆を擱く。

(了)

(筆者 おぐま・せいき 竜谷大学文学部〔哲学・倫理学〕教授)

前号(五四三号)の誤植訂正

	誤	正
二頁六行	anu-si	anu-si
二頁八行	ἐπιθετικῶν	ἐπιθετικῶν
二頁十四行	ἀνα	ἀνά
二頁十七行	ανυας	ἀναυας
二頁十九行	prapti anusangatah	prāptyanusāṅga
三頁一行	anuserate	anusērate
三頁二行	anubadhanti	anubadhanti
四頁十三行	ἀναρπώματα	ἀναρπώματα
四頁十六行	ἐξ ἀνυας εἰς	ἐξ ἀνυας εἰς
	ἡρώτων μεταβολή	ἡρώτων μεταβολή
十三頁十八行	ものではないではない。	ものではない。
七頁十六行	Hegel seigenhandiger	Hegels eigenhandiger
八五頁八行	この要請はまた。	この要請はまた、
八五頁十行	方向が存在せず。	方向が存在せず、
九九頁十四行	transzen entale	transzendentalte